江戸における地方文化の流入

——『北越雪譜』出版をめぐって——

林　絢子

目　次

序　章
第一章 先行研究
第二章 江戸からみた地方文化—記録される地方文化
第一節 考証家たちの集まり
第二節 旅する知識文化人
第三章 『北越雪譜』出版をめぐって
第一節 山東京伝のプロデュース
第二節 馬琴のプロデュース
第三節 京山のプロデュース
第四章 『北越雪譜』出版後の反応
第一節 馬琴の反応
第二節 江戸知識人の反応
終　章

序　章

『北越雪譜』(1) とは、近世後期、越後国南魚沼郡塩沢に住んでいた縮仲買商鈴木牧之が、豪雪地帯である地元の南魚沼郡の自然・生活・産業・年中行事について、在地の視点で記した記録集である。この本は初編三巻と二編四

巻の計七冊からなっている。『北越雪譜』初編上巻は魚沼の雪とその生活、中巻は牧之の本業で魚沼の特産品でもある越後縮、下巻は南魚沼郡を流れる川、魚野川で獲れる鮭漁を中心に書かれている。二編四巻は、初編の雪に関連した内容と一変して、越後についての名所紹介と越後の奇談が主な内容になっている。さらに、「百樹曰く・・・」として、山東京山の筆が入っている。

『北越雪譜』初編が江戸で出版されたのは天保八（一八三七）年だが、構想から出版に至るまで四十年の月日が流れている。また、出版の後ろ盾をした文化人にしても、山東京伝・岡田玉山・鈴木芙蓉・滝沢馬琴といった、そうそうたる人物を経て、山東京伝の弟、山東京山の手によって、ようやく出版が現実のものとなった。

雪の厳しさ、そこから紡ぎ出す文化について、魚沼郡以外の人間たちに伝えようとした『北越雪譜』の出版は、

> 開板せぬ以前より江戸中の評判大当たり、此噂の通り近年番付何となく流行せしかば
>
> 雪譜の題号　小結の右[2]

とあり、

> 書買の請に応じ老人に告げ梓を許し以世に布しに、発販一挙して七百余部をひさげり[3]。

と、江戸にとって、全く無名だった地方在住者の人間が書いた本にしては、異例の売上げを記録した事が分かる。

また、上方で雪の結晶柄の着物が流行るなど、中央の文化にとって少なからず影響を及ぼしている。

本の中で、日常生活に密着する雪にこだわり、

> 風雅をもって我国に遊ぶ人、雪中を避けて三夏の頃此地を踏むゆえ、越路の雪を知らず[4]。

風雅の対象としての雪を非難する一方で、都市部の文化人達の協力なしでは出版できなかった経緯も皮肉である。

しかし、『北越雪譜』の主な読者層でもある江戸の文化人達も、地方の文

化、生活風俗に強い関心を持ち、毎月開かれる文化人達の集まりで、地方にある民芸品や古書画等が彼らの眼に晒された。また地方独自の風俗や生活文化が、会合の参加者でもあった戯作者たちの著作の中に書き加えられている。そして、彼らに資料を提供したのは、鈴木牧之のような地方に住む文化人達である。曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』や随筆にも、牧之が提供した民俗資料が、馬琴の手によって書かれている。

江戸の文化人達が、地方の文化・人に対してどのような視点で見ていたのか。江戸の学問ブームの中で書かれた『北越雪譜』の存在は一体何なのか。本稿では『北越雪譜』出版の流れを中心にして考察していく。

第一章　先行研究

『北越雪譜』に関しての研究は、主に近世文学・歴史学の視点から語られる事が多い。

表智之は、「十九世紀日本の地方文化と収集家たち」（『日本思想史研究会会報』二〇〇三）で、十九世紀、都市の学問ブームの中で、地方文化がどのような立場に置かれていたのか考察しており、さらに『北越雪譜』について

> 伝統的な詩情の体系の外部に、雪国の風景というこれまで読まれたことのない対象が存在することをつきつけ、新たな詩情の体系の編成を迫っているのである

と論文の中で、江戸における『北越雪譜』の意義について述べている。

牧之と馬琴の関わりについては、水野稔が馬琴研究の立場から「馬琴の短編合巻」（『文芸研究』一九六四）で、馬琴と牧之が書簡を交わしていた文政四年から文政十一年にかけて、馬琴の作品の中に牧之の名前が登場している事を指摘しており、さらに高橋実が「馬琴と牧之の交流」（『近世文芸』一九七四年）の中で水野の指摘について、より踏み込んだ形で、牧之が登場する馬琴の作品を取り上げている。さらに、高橋は、「馬琴と『越後雪譜』」（『国語と国文学』一九七八）で、馬琴の日記・著作等に基づいて、牧之と馬琴の出会いから決裂に至るまでの経過についてまとめている。

今まで、京伝の弟というだけで、無名に近かった山東京山について、初めて光を当てた津田真弓が「『山東京山書簡集』小考」(『国文目白』二〇〇一年)で山東京山書簡集の順序の誤りを指摘すると共に、書簡集を通して京山の立場から牧之と出版のやりとりについて考察している。

『北越雪譜』出版後の反響について井上慶隆が「北越雪譜の出版と改刻」(『新潟史学』一九六八年)が、『北越雪譜』について評した資料を具体的に表わし、さらに、桜沢一昭が「『北越雪譜』以後」(『隣人』一九九一年)で、『北越雪譜』が、民俗学者の柳田國男や南方熊楠だけでなく、気象・自然科学の視点からも資料価値の高いものとして読まれ、川端康成が『北越雪譜』を参考にして『雪国』を書くなど、近世から近代に至るまで、当時の時代背景の変遷と共に、『北越雪譜』がどのように読まれ、どのように評されてきたか記述している。

第二章　江戸からみた地方文化—記録される地方文化

第一節　考証家たちの集まり

牧之が『北越雪譜』を書くきっかけになったのは一体何だったのであろうか。

牧之が生きた十八世紀後期から十九世紀初頭にかけて、江戸では、木内石亭を中心に奇石・鉱石を持ち寄り展覧する「弄石社」を始めとした、都市部の文化人達が、様々な標本・考古品などを持ち寄り、批評・考証し合うような会合が盛んに行われていた(5)。

そして、その中で最もよく知られた会合が耽奇会である。雑学者の山崎美成を中心に、屋代弘賢・谷文晁・曲亭馬琴といった著名な江戸の文化人達が集まり、ウンスンカルタから唐人形といった古器材や珍品を各々持ち寄る会合が、文政七(一八二七)年五月から八(一八二八)年十一月まで月一回の割合で二十回にわたって行われていた。この耽奇会で持ち寄った品々は『耽奇漫録』八巻二十集の中に記述・模写されている。この会合で馬琴が持ち寄った越後に関する珍品、物品については、文政七(一八二七)年十二月十八

日に行われた第九回目の会合で、柏崎に上がった「海獣」[6]、文政八（一八二八）年二月の十一回目の会合で、魚沼郡妻有で使われていたソリ・カジキなどの「雪具」[7]、三月十三日の十二回目の会合で「原本北越某氏蔵」と書かれた「越後春日山古城図」[8]、そして、同年十一月十三日に行われた二十回目の会合では、紹介文に「苗場山の図は越後人鈴木牧之より登頂せし」と牧之の紹介と共に、牧之が描いた「苗場山真景」[9] 八枚を持ち寄っている。耽奇会と平行して行われたものに兎園会がある。文政八（一八二八）年正月から十二月まで、耽奇会と同じメンバーで行われ、耽奇会の考証の対象がモノであるのに対し、兎園会は日本各地の怪談や奇談を持ち寄り披露する会合である。この会合での記録をまとめたものが『兎園小説』十二巻で、馬琴は第四集の中で「七ふしぎ」として、越後の奇談を載せている[10]。

また、馬琴は自らの考証随筆である『玄同放言』[11] に牧之が提供した資料を載せようとしていた。牧之が『玄同放言』の資料を提供したことに関しては、牧之が馬琴の手紙をまとめた馬琴書簡集の中に書かれている[12]。

馬琴は、両山富士銅堂並古鏡を四巻器用ノ部に、雪蛆と海獣を五巻動物ノ部に加える予定だった。五巻動物ノ部では越後闘牛ノ図も加入しようとしていたが、現在『玄同放言』は三巻しか残っておらず、雷獣のみ、牧之が描いた雷獣の絵と共に、一巻上の天ノ部に記録されている。

又近ころ越の後なる一友人より、異形なる雷獣の画図一頁を獲たり、その図説に云、元禄年間、夏六月中旬、越後国魚沼郡、妻有の近村、伊勢平治村なる、観音堂の辺、深田の中に陥りつつ、竟に斃れふし雷獣ありけり（中略）

越後塩沢牧之なる鈴木牧之（通称義三二）は素より好事の人なれば、余が為に、件の図説をうつしとりて、附郵して見せらる。牧之云、且今の事いふとも、そら言多かるに、況て百とせあまりの事なれば、証とすべき人もなし[13]

牧之は、こうした考証ブームの中で、馬琴のよき資料提供者であった。

このような時代背景によって地方の習俗・文化は都市部の文化人達に知られていくようになったが、それらは事物・事例の考証の為に、資料活用とし

て使われるだけにとどまっており、その周辺にある地域の独自性や生活空間の考察にまで至っていなかった。

第二節　旅する知識文化人

江戸時代に入り、国内が平和になった事によって地方への旅行が頻繁に行われるようになってくる。江戸後期になると物見遊山の旅行だけでなく、学術的な目的で日本各地を巡る旅行者が増えてくる。知識人でもある彼らは、訪れた土地について旅行随筆を数多く残し、もちろん越後も例外ではなく、中央の知識人たちが越後を訪れ、越後について記した旅行記を残している。その中で、最も著名な例が、松尾芭蕉の『奥のほそ道』(元禄十五年刊)であろう。歌人の芭蕉は東北を周遊し、越後を訪れ、直江津と新潟で、俳句を二句詠っている。さらに天明八（一七八八）年には、地質学者の古川古松軒が、幕府の巡見使に同行し、東北地方と北海道を視察した『東遊雑記』[14]がある。六月十二日に福島県県境の小国から越後国岩船郡畑村に入り、越後にしかない植物・石について克明に記している。

また京都の医者、橘南谿が医学修行の為に諸国を遊歴し、天明五（一七五八）年に新潟を訪れた様子が『東遊記』[15]（寛政九年刊）に記録されている。戯作者の十返舎一九は、文政十一（一八一四）年に江戸から信州を通って越後を訪れた記録を戯作にして記した『金草鞋』第八編[16]（文化十三年刊）、さらに、文政元（一八一八）年に再び越後に四ヶ月滞在し、そこで取材したものを記録した『滑稽旅烏』[17]（文政三年刊）を著した。また、この紀行文の中で、一九は鈴木牧之の元を訪れ、雪の洞穴・熊捕りを見学している。
このような旅をする都市部の知識人たちに対して、

> 芭蕉翁が奥に行脚にかへるさ越後に入り、新潟にて『雪に降る雨や恋しきうき身宿』寺泊にて『荒海や佐渡によこたふ天の川』これ夏秋の遊杖にて越後の雪を見ざること必せり。されば近来も越後に遊ぶ文人墨客あまたあれど、秋のすえにいたれば雪をおそれて故郷へ逃げ帰るゆえ越雪の詩歌もなく紀行もなし[18]。

牧之は、越後の雪を詩情的な対象としか捉えていないとして『北越雪譜』の

中で手厳しく非難している。

しかし、彼らが、雪の脅威に対して、全く関心がなかったとは思えないのである。

橘南谿の『東遊記』は、冬に東北を旅行し、「葡萄嶺雪に歩す[19]」では、三月に越後の村上を訪れ、羽前国に行くために雪が深く積もる県境の葡萄峠を越えようとするが、雪に埋もれた山道と谷底を見て断念してしまう。

数十丈の雪に埋まれて、雪消尽くす迄は知る人もなし。此れ二つ(ナダレとアワ)は北地の人の恐るる事也。日此は只なおざりに聞居たりしが、今日の気遣い、思い出すも肝ひゆる心地する[20]。

と、山越えにあたり、雪の恐ろしさ・雪に埋もれた山越えの恐ろしさについて記している他、出羽国吹浦を訪れた「吹浦の砂碩」では、北国の天候の激しさに

昔より北地に遊ぶ人は、皆夏ばかりなれば、草木も青み渡り、風も南風に変り、海づらものどかなれば、恐ろしき名にも立たざる事と覚ゆ。我北地に至りしは九月より三月の頃なれば、途中にて旅人に絶えて逢う事なかりし。我旅行は医術修行の為なれば、格別の事也。只名所をのみ探らんと心にて行く人は、必ず四月以後に行くべき国なり[21]。

また、江戸の商人、伴高蹊は随筆『閑田次筆』で越後ではないものの、冬二月に出羽を訪れ、

末々雪に苦しみしさま、よむも身の毛たち心地するを、吾里の外しらぬわかき人に、世わたらひくるしきこともありとしらせばやと、所々ここにぬきうつす[22]。

と、雪に埋もれた出羽国の様子について詳しく記述しており、さらに正月十五日にさえの神の祭りを見ている。

十返舎一九も『滑稽旅烏』で、塩沢の鈴木牧之を訪れ、雪の洞穴を通り、マタギに同行して熊捕りを見学している。

いずれも一時的に逗留しただけの旅行随筆ではあるが、どの紀行文も雪を詩情の対象としてではなく、自然の脅威として、その周辺に住む人々についてしっかり記録している。

そして『北越雪譜』にも、『東遊記』の「化石渓」を読んだ記述[23]がある事から、牧之がこれらの紀行文に目を通していないとは思えない。

なぜ、牧之はここまで批判をするのだろう。おそらく、牧之の批判の矛先は、中央の知識文化人たちだけでなく、同じ越後の知識文化人たちに対してではないだろうか。

越後からも、越後国について書いた地誌がいくつか出ている。

宝暦六（一七五六）年に、越後国出雲崎の医師、丸山元純が、越後について書いた『越後名寄』三百巻[24]が出版される。しかし、この本は、越後の自然現象や、名所・旧跡について項目ごとにリストアップして記録しているだけで、名所図会の域を出ていない。また、医師という職業柄か、動植物や自然現象の方に重きを置いており、本草学としての性格が強い。

雪の記述も一巻の天象の項で記述されているが、

> 当国に最雪の名高し。年々馴て見る事なれと、初雪のあした、風なき木々の梢に掛りし風情、実に花より珍と思じへり。淡月の雪の夕へ、冴たる月の夜半又類なし[25]。

と、雪を詩情的な対象として捉えており、この本から雪の恐ろしさや、その下で暮らす人間の生活の様子が全く見えてこない。牧之は、『北越雪譜』の中で

> 『越後名寄』という書を見せられしに、三百巻自筆の写本也。名寄とはあれど越後の風土記なり。一国の神社仏閣名所旧跡産地地理人物国産薬品の類までも、部を分図をいだして通暁しやすくしたる精選也[26]。

『越後名寄』について越後から、このような本が出た事には評価はしているが、風土記のような内容に満足はしていないと評している。

また、牧之と同時代に『北越奇談』[27]が出版されている。『北越奇談』は越後国三条に住む橘崑崙が書いた越後の奇談を集めた奇談集である。『北越雪譜』より二十四年前、文化八（一八一一）年に刊行されたこの本は、出版を協力したのが江戸の戯作者、柳亭種彦であり、そして、挿絵の大部分は江戸を代表する浮世絵師、葛飾北斎が書いたことでよく知られている。『北越奇談』について牧之は

吾が国三条の人、崑崙山人、北越奇談を出版せしが六巻絵入りかな本文化八年板一辞半言も雪のことをしるさず。今文運盛んにして新版湧くがごとくなれども日本第一の大雪なる越後の雪を記したる書なし[28]。

と、同じ越後の人間でありながら雪の記述が無いことに厳しく批判している。越後から地誌が数冊出版されていながら、自分たちの雪に埋もれた生活についての記録が何故無いのか。無いのなら自分で書いて他国に知らしめるしかない。この決意が『北越雪譜』出版のきっかけになっていったのは間違いないだろう。しかし、この牧之の強い決意も江戸の文化人達の意向で曲げられる事になる。

第三章『北越雪譜』出版をめぐって

第一節　山東京伝のプロデュース

牧之が、『北越雪譜』の出版を考えるようになったのは、いつの頃からだろうか。

水野稔の「山東京伝年譜考」[29]によれば寛政十（一七九八）年二月に江戸の戯作者、山東京伝に草稿並びに絵図・雪具の雛型を送り、出版を打診している。牧之が明和五（一九六八）年十二月の生まれだったことを考えると、牧之が二十九歳の頃に山東京伝に出版を依頼していたことになる。

京伝に草稿を送った事について、牧之の日記である永世記録帳の中で、

文化四年（一八〇七）年　寛政年中、東都著述者山東京伝並ニ曲亭馬琴と、年来之入魂故に、右の京伝へ雪中之奇談拙画草稿可仕候間、出版いかかと申越候処、早速承知上、題号北越説話と仕、山東京伝著述北越鈴木牧之校之と仕、出版可致と請合い、内見候書林ニ百金も入る沙汰故、無処見合わせ罷過、又々馬琴へ右之形申候処、馬琴申候は此方に而は決而金子等には不及、随分出版可致候らへ共、左候へは、朋友之京伝兄弟同前、中万一不和にも相成候而は、何れ右之功を此方へ集まり候而は相成らずと義理立て（略）[30]

とある。

京伝が、牧之の草稿について食指を動かした事は、山東京山の手紙をまとめた山東京山書簡集にも、弟の京山が亡くなった京伝を偲ぶ形で記している[31]。

しかし、文化十五（一八一八）年の永世記録帳には、草稿の表題（若干違っているが）及び、本の内容まで決めており、京伝は出版について乗り気ではあったが、著者がお金を出して買い取る自費出版の形を取ろうとしたため、牧之はお金を払ってまで自分の名前を売る気はない、として、京伝の提案を断った。「金銭を出して名利を求むるに似たり」[32] この一文に、牧之の愚鈍なまでの率直さがうかがえる。

京伝の方は草稿の刊行には至らなかったものの、牧之からもらった草稿と雛型は長い間大事に保管しており、山東京山書簡集の中に

依之亡兄手択の抄録などを取り調べ申し候内、小風呂敷に包み、出火持ちのきと申札紙付候ものあり、開き見候へば、前年貴君より御認め被遣候ニ季雪話と申す横本の絵抄並越後国絵図一枚、渋張小箱の内に、雪車、すかり、かちぎの類の雛型なり[33]。

と記されている。

しかし、牧之の草稿を出版しなかったことについて、後にこれが江戸の噂になり、天保三（一八三二）年、江戸の国学者を過去の偉人の名を借りて批判した小説家主人（こことやしゅじん）著の『しりうごと』[34]「裕天大僧正、小山田与清を呵す」の中で

かれが先年ある人のもとより、雨雪の事実をくはしく書き綴りて校合に越たるを、其人をあざむきて終に帰さず、おのが著述の戯書の中へ、そつくりと書きつらねて、見て来たるやうに人を欺きし報悪なることを説きさとして、かれをば呵りかへしたれども、その方が卑劣のこころをため直さんとおもふ故に、いひ聞かせておく[35]。

と書かれてしまう。

京伝が駄目なら、と、曲亭馬琴に草稿を送り出版の打診をしたが、京伝の門人でもあった馬琴は、京伝に遠慮して牧之の依頼を断る。次に、牧之は『北越雪譜』「玉山翁が雪の図」[36] で、『絵本太閤記』四編十二巻「前田不破

金森雪中秀吉に使わす」[37]の挿絵について、十二月の雪の上を軍馬が歩くのはおかしいと、挿絵を描いた上方の画家岡田玉山に指摘し、その事がきっかけで玉山と交流するようになり、そして自分の草稿を送り出版を依頼する。

第二節　馬琴のプロデュース

京伝から画家の岡田玉山・鈴木芙蓉を経て、再び馬琴に出版を依頼した経緯については永世記録帳の文化十五（一八一八）年正月下旬の日記[38]で見ることが出来る。

岡田玉山が描いた絵の誤りを指摘した事から、岡田玉山に出版の約束を取り付け、草稿を送ったものの玉山は故人となってしまった。

その後文化九（一八一二）年、江戸の画家、鈴木芙蓉が八月上旬に塩沢を訪れたことが永世記録帳に記されている[39]。牧之は芙蓉に『北越雪譜』の出版に期待を託していたが、芙蓉も翌年に亡くなってしまう。三たび草稿を書き送ったものの、徒労に終わってしまう牧之の無念さがうかがえる。

一度は、馬琴に依頼し断られたものの、文化十三（一八一六）年に京伝が亡くなり、その翌年の文化十四（一八一七）年に再度出版を打診して承諾を得る。

> 先年は馬琴の朋友京伝にさし合引請、雪事空敷候へ共、作年京伝故人と成候上は、海内に馬琴の遠慮仕なしと早速引請、越後雪譜と題して大　本六冊に支度候由、依之、金銭を入すして海内へ鈴木牧之と顕し候事本意故、此春より玄同方言の加入之考、並に雪中々考、図画或は雪舟・橇・履きもの・木鋤等雛形ノ才工いたし、追々送り候也、依之、業の間哉透哉、棹に向、月々の文通に世話敷暮し候事、[40]

前述の『耽奇漫録』十一回目の記録で馬琴がソリや雪下駄などの雪具を持ち寄っている。「牧之」の名前は直に書かれていないが、この時持ち寄った雪具はおそらく牧之が送った雪具の雛形ではないだろうか。

馬琴と牧之との書簡のやりとりを記した馬琴書簡集で、馬琴は、『北越雪譜』出版の実現に向けて、色々と牧之に指示を下している。文政元（一八一八）年二月二十日の書簡[41]には、牧之の草稿に対して、雪の話だけでは面白味

が無いと指摘し、雪だけでなく、読者の目を引くような一般的な名所・見所も加えるように催促している。つまり、馬琴は名所図会・名所記の書き方に従って書くように指示している。

又近年山海図会、二十余拝名所図、閑田次筆、東遊記、北越奇談等に雪舟の図、その外雪中の話、くはしくは無之候いへども追々書きあらわし出版いたし候事なれば、これから出たる分は、説を存して図を省き、或いは図を出して説を略すべし。かくせざれば二の町になるべし[42]。

牧之の草稿が書かれている以前に、『東遊記』『北越奇談』などの紀行文・名所図会によって越後国、そして越後の雪のイメージが既に出来あがっている。これらの紀行文のコピーにならない様に差をつけて書け、と。続けて馬琴は語る。

板本の作者は書をつづるのみにあらず、かく申せば自負似てははづかしく候らへ共、作者の用心は第一に売れることを考え、又板元の元入り何程かかる、何百部うれねばいた代がかへらぬと申事、前広より胸勘定して、その年の紙の相場までよくよく心得ねば、板元為にも身の為にもなり不申候[43]。

さらに同年七月二十九日の馬琴の書簡[44]には、出版に関して素人同然の牧之に、自らの経験を踏まえて、売り物としての本の書き方、出版の難しさについて詳しく教え諭している。

読本の出版は、精密な挿し絵、厳密な校正を必要とし、その分時間もかかり、費用も莫大にかかる。その費用を回収できるために、確実に本の部数を捌かなくてはならない[45]。本の売上の事を考えると慎重にならざるを得なかった事が、馬琴の書簡から窺える。

しかし、これらの書簡から、牧之が書こうとしている事と馬琴がやろうとしている事が明らかに対立しているように見えてならない。

牧之がやろうとしている事は、単なる奇談集や、越後国の名所図会ではないのだ。雅な風物詩として愛でられた雪ではなく、人間の生活や一生までもおびやかす越後の雪と、その下で耐えながら生活する雪国の人間の悲しみ、そのものを描こうとした。そして、それを自分の住む魚沼郡以外の人にも読

んで欲しかった。一方で、馬琴は、売れる事を第一とした読者を意識した本に仕上げようとした。その為なら、多少誇張して書いても構わない、と。二人とも、お互いに読み手を意識していたとはいえ、読み手に何を伝えようとしているのかが、根本的に食い違っていた事については、牧之にとっても馬琴にとっても互いに不幸な事であった。

しかし、馬琴も牧之にあれこれ指示を出していただけではない。文政三（一八二〇）年、馬琴は、考証随筆『玄同方言』二集の巻末[46]と、『南総里見八犬伝』第四集第四巻の巻末に

「江戸著作堂主人著　越後塩沢鈴木牧之校訂　越後雪譜　近刻」

と、紹介文と共に広告を載せているのである。

さらに、水野が

文政四年から文政十一年にかけての馬琴作短篇合巻の中にしきりに牧之に関した名が登場しているのである[47]。

と指摘し、高橋が、牧之の名前・俳句を載せた馬琴の作品を挙げている。

表　馬琴作品に見られる牧之の宣伝　高橋(1974)より作成

作品名	宣伝方法	年　代
六三之文車	詞書の中に牧之の名前	文政四(1821)年
照子池浮名写絵	挿絵に秋月庵牧之の名前で狂歌がある 「雪霜をうけつ流して香はわらに、鼻をつきぬく庭の植梅」秋月庵牧之 挿絵の井戸の部分に、越後塩澤　鈴木牧之と碑銘が載っている 登場人物　袈裟次郎の台詞に、 「越後は新潟出雲崎、越前の三国まで尋ね巡って後より上らん、越後には 牧之といふ頼もしい人ありときく。俳諧が好きじゃげな、それを頼らば気遣いない、 母御の苦労になされぬように大義ながら頼むぞや。」	文政五(1822)年
書油横河原祭文	口絵に北越ふし女の名前で歌がある。	文政六(1823)年
殺生石後日怪談	口絵に北越ふし女の名前で歌がある。「ふじ」は牧之の妹の名前	文政七(1824)年
大齟荘子蝶胥笄	挿絵の中に秋月庵牧之の名前で狂歌がある。	文政九(1826)年
姫万両長者鉢木	挿絵の扇の部分に「細人倅優俳　秋月庵書」とある	文政九(1826)年
月宮吉阿玉之池	北越牧之の名前で狂歌がある	
六年女夫繊玉川晒布	口絵に秋月庵牧之の名前で狂歌。	
南総里見八犬伝	第四輯巻之四　巻末部分に「越後雪譜　江戸著作堂老人著　越後塩澤鈴木牧之 考訂　近刻」と宣伝広告	文政三(1820)年
	第七輯巻之五　鬪牛の挿絵	文政十(1827)年
	第七輯巻之七　鬪牛の挿絵と、終り部分「曲亭主人日遣個の鬪牛の光景は越後国 魚沼郡塩澤の里長鈴木牧之が庚辰の春三月廿五日彼の地に到りて目撃さる図説 申しとり抑鬪牛の一奇事の越後雪譜中にのすべきものなれど」と資料を提供して くれた牧之と越後雪譜出版についての紹介文が書かれている。	文政十三(1830)年
玄同放言	第二巻巻末部分に「江戸著作堂主人著　越後雪譜　越後塩沢鈴木牧之考訂 この書は、北越冬春の間、雪中の奇観　雪舟　橇　スガリ　スンヘイ　雪下駄木の図説 良賤　冬篭の為体・大吹雪　雪崩　雪吹仆の奇談。縮織体・雪中窩獣を捕る機関。 異形の鳥獣・火山。名所。古戦場。ふる　碑揭まで。悉図説をあらはす。西南薄雪 なる地方の人。特　視聴を驚く珍書なり。」	文政三(1820)年

これらの作品の中に牧之が直接関わっているとは考えにくい。おそらく馬琴が、自ら作って作品に織り込んだものだろう。馬琴にとっても『北越雪譜』

の出版は、決して小さいものではなかったのである。

さらに、馬琴は自らのライフワークでもある『南総里見八犬伝』の中にも牧之が提供した資料を織り込んでいる。

文政十（一八二七）年、『南総里見八犬伝』第七輯巻之五付記に書かれた「八犬伝七輯巻之五に附記す闘牛考並び小狗の略説」[48] では、越後国古志郡で行われる牛の角突きが、牧之が描いた原画と共に紹介されている。

実際、『南総里見八犬伝』を始め、『玄同方言』・『朝夷巡鳴記』などの執筆を抱え、馬琴は甚だ多忙であった。仕事と家庭の問題が片付かず、『北越雪譜』に手がつけられない自分の状況について、馬琴は、文政七（一八二四）年、文通相手で、牧之と同じ越後に住む小泉蒼軒に宛てた書簡「令問愚答」[49] で、やや愚痴のように綴っている。

しかし、文政十一（一八二八）年になると馬琴にも若干の余裕ができていたのか、『北越雪譜』出版に向けて、ある程度の進展が見えてきた事が分かる。

文政十一（一八二八）年正月の牧之宛の書簡には、こう記されている。

文政十一年正月三日　『雪譜』の事、此節彫刻いたし度と申板元、有之よし、去冬十二月中、画工英泉参り、被申述候。板元たしかなるものに侯はば、追々可致相談旨、申し談じ置候[50]。

同じような内容の書簡を、馬琴の文通相手の紀州和歌山に住む、殿村篠斎に対しても送っている[51] ので、『北越雪譜』を彫ってくれる板元が現れたのは事実なのだろう。また、同年九月二十五日の馬琴の日記[52] にも、画工や板元と共に雪譜について打ち合わせをしていた事が書かれている。

しかし、第七輯が出版されたのは、文政十三（一八二九）年である。

第七輯巻之五に続けて、第七輯巻之七「客を留めて次団太闘牛に誇る」[53] では、八犬士の一人、小山田文吾が、小千谷を訪れ、そこで牛の角突きを見学中に、暴れ出した牛を取って押さえる場面が挿し絵と共に記されているが、この物語の後で、

曲亭主人曰、這個の光景は塩沢の里長鈴木牧之ヶ庚辰の三月廿五日彼地に至りて目撃したる図説によれり抑闘牛の一奇事は越後雪譜中にの載すべき

ものなれども、毎歳筆研繁多にして、いまだいまだ創する遑あらず。且老歩旅行をいとふの故に、牧之の企望を空くせじとて、言のここに及べるなり。写真の図は、巻の五の簡端に見えたり[54]。

と馬琴は、牛の角突きの資料提供をしてくれた牧之の紹介と共に、自らの多忙さゆえに北越雪譜の出版が、未だに遅れている事を明らかにしている。『北越雪譜』の出版まで、まだ時間がかかりそうであった。

第三節　京山のプロデュース

『北越雪譜』出版が未だ膠着状態であった鈴木牧之に、山東京伝の弟、山東京山から書簡が来たのは、文政十二（一八二九）年だった。この文政十二（一八二九）年から始まる京山と牧之の書簡のやりとりについては、山東京山書簡集に記されている。しかし、山東京山書簡集に記載されている書簡の順序に間違いがあると、津田は指摘する[55]。

山東京山書簡集の一通目から十一通目までの書簡の日付を並べてみると、

1．九月十八日
2．九月十九日
3．九月二十日（文政十二年）
4．十月十九日（文政十二年）
5．十月二十一日（文政十二年）
6．十一月晦日（文政十二年）
7．三月十六日
8．四月二日
9．四月二十三日
10．四月二十日
11．十二月十二日

となるが、津田は、この一通目と二通目の九月十八日と九月十九日の書簡が、文政十二年のものではなく、その翌年の文政十三（一八三〇）年九月に出されたものではないかと述べている。

その根拠の一つとして、九月十八日の書簡に書かれた『熱海温泉図会』[56]

の記録を挙げている。九月十八日の書簡[57]には、七月六日に京山が、末の息子梅作（京水）と共に熱海を訪れ、その逗留中に『熱海温泉図会』を作ったと書かれているが、『熱海温泉図会』は、京山が三週間ほど熱海に滞在した際に、熱海の温泉の紹介・効能及び、神社・仏閣等の見所を記述した、いわば熱海の名所図会のようなものである。この本の序文に文政庚寅七月、また本末に文政十三年七月と書いてある事から、『熱海温泉図会』が文政十三（一八三〇）年に出版されたことになる。したがって『熱海温泉図会』の記事が載っている九月十八日の書簡は、文政十二年ではなく文政十三年に出された書簡であるという事になる。そして、二通目の九月十九日の書簡であるが、この書簡は出版について、京山なりの構想を具体的に記した重要な内容の書簡である。しかし、まだ牧之との間に、そこまで緊密な関係が出来上がっていない。さらに、一通目と二通目には年号と題名が何も書かれていないのに対し、三通目の九月二十日の書簡には、「越の雁」という題名が付けられ、

殊の外繁雑、依而御返事もついつい延引いたし候節即怠慢の至り申訳無之あやまり入申候[58]。

と、序文に返事が遅くなった事を詫びる一文が書かれている。

これらの事から、九月十八日と九月十九日の書簡は、文政十二年のものではなく、文政十三年の四月二十日と十二月二十日の間に送られた書簡ではないかと指摘しているのである。

だが京山は、文政十二（一八二九）年に初めて牧之に書簡を送る以前から、『北越雪譜』の出版に、興味を示していたように思う。

京山の作品『鷲談伝奇桃花流水』[59]の巻末に、

北越雪中図会　近刻全五巻　山東京山並蔵版　此書は作者雪中にありて作れり雪中熊をとる図説雪中に出ずる奇虫異花のるい雪中ちぢみを晒す図説雪車橇雪帽の図るいかの地雪のふりはじめよりゆきのとどくるまでの事さまざまのきだんをしるせり[60]。

と広告を出しているが、この本が出版されたのは文化六（一八〇九）年である。その頃の牧之は、出版の依頼を京伝から玉山に変更するが、玉山が亡く

なったため、出版の計画が白紙になった時である。京山が戯作者として、初めての作品『復讐妹背山物語』[61]を発表したのが、二年前の文化四（一八〇七）年で、まだ駆け出し同然の京山に、他人の本の出版まで面倒を見られる余裕があるとは思えない。

何故、京山がこのような広告を出したのか、その時に牧之とどのような経緯があったのか、よく分かってはいない。しかし、雪に対して関心が強かったのは確かである。

さらに、馬琴と出版の交渉を進め始めていた文政元年（一八一八）年には、京山が牧之に出版の話を持ちかけていた事が馬琴の書簡に書かれている[62]。

牧之の草稿を出版したいという申し出は、本来ならば歓迎すべき事なのだが、申し出た相手が京山というのは、牧之にとっても馬琴にとっても、いささか相手が悪すぎたというより他ならない。

京伝の門人でもあった馬琴と、京伝の弟でもある京山の感情的な仲の悪さは非常に有名であった。馬琴の書簡には、京山が出版を申し出た事について、続けて京山の事を書いている。京伝が亡くなった後、京山が京伝の先妻百合を追い出した事を打ち明け、そして、京山が出版の申し出をした事は、単なる牧之への社交辞令に過ぎない、と、冷淡に記している[63]。

一方の京山も馬琴について、牧之宛の書簡の中で激しく罵倒しており、特に、文政十三（一八三〇）年四月二十日に出された書簡、「蛙鳴秘鈔（あめいひしょう）」[64]では、馬琴の生い立ちから、いかに自分の兄、京伝が馬琴に目をかけ、ひとり立ちできるように世話をしてきたか、そして京伝が亡くなったのに、馬琴は葬式にも墓参りも来なかった事などが、詳細に綴られている。「蛙鳴秘抄」だけでなく、他の書簡にも馬琴に対して感情的過ぎるほどの罵詈雑言が書かれているのを見ると、よほど馬琴に対して深い憎悪を持っていたように思う。

京山が書簡を寄越してきた文政十二（一八二九）年、この時牧之は六十歳になっていた。未だに、『北越雪譜』の出版がされていない事の焦りと、牧之が出版の協力を馬琴から京山に乗換えた事について、天保七（一八三六）年に、牧之が馬琴の書簡をまとめた馬琴書簡集の序文[65]で記している。

牧之が出版を再度催促した事がよほど腹に据えかねたのか、文政十二年の

この年をもって、馬琴と牧之の交渉は決裂してしまう。そんな折に京山から書簡が来るのである。前述の津田の指摘に従って、文政十二（一八二九）年九月二十日の書簡「越の雁」を一通目として、京山書簡集を読んでいくと、三通目の十月二十一日の書簡[66]に、出版にむけて題名や構成等の具体案が記されている。牧之からの費用は必要ないとの事や、馬琴との交渉時、馬琴の宣伝広告を見る限り、本の著者が馬琴で、牧之は校訂者の立場であったのに対し、京山は、著者が牧之で、当の京山は校合の立場でいいと述べている。また、出版費用がかかる読本ではなく、価格の安い草双紙にする案や、本の表題から構成まで非常に具体的に記されでいる。馬琴に対してまだ遠慮があったとはいえ、牧之自身の心も相当揺れ動いたのも無理はない。

文政十三（一九三〇）年に入り、牧之は出版の依頼を、馬琴から京山へ振替える。京山が牧之に宛てた九月十八日の書簡[67]から、牧之が馬琴と手を切ったこと、そして出版の依頼を京山に頼んだ事がうかがえる。

こうして、長い間膠着状態だった『北越雪譜』は出版に向けて、再び動き出したのである。

副啓として書かれた九月十九日の京山の書簡には、京山なりの出版構想のほかに、出版費用の見積もり、読本と合巻の販売方法の違い、手早く上梓させる方法について書かれており、非常に興味深い。

雪談を手早に上梓せんとおもへば、出板諸雑費の入銀として、金十両も板元へ出板次第可贈対談いたし、先づ金五両を草稿へ付手渡し、無相違出板すべ視と異父証文をとり、二巻の内一巻も刻上けたける摺本を見て、残り五両を渡すの約を証文へ書加える手段に候。金を見せたらば相談ただちに出来可申と存候。入銀致すからは此よな事にいたあし候事入　銀の光なり[68]。

上の文は、手早く上梓させる方法について記したものであるが、出版事情に精通した京山の実務能力の手堅さを表わしている。

京山は、早くから戯作者としての才能を開花した兄の京伝とは違い、元々は武士であった事、また戯作者としてのスタートは三十九歳からという遅いスタートであった事などの経緯[69]、また牧之宛の書簡に、出版に向けて板

元との一切合切のやりとりを逐一報告している仕事の手堅さから、どこか牧之も安心して、全てを京山に委ねられるゆとりがあったように見える。もともと文政十三（一八三〇）年に、京山は熱海の温泉・名所について記した名所図会『熱海温泉図会』を作っており、この地誌を作った経験が『北越雪譜』出版に一役買っていたのは言うまでも無い。

だが、京山自身も、牧之が伝えたかった越後の雪と、その下で生活する人間の悲しみを、どこまで理解できたのか甚だ疑問である。

天保五（一八三四）年十二月十六日の書簡[70]には「雪話はしばらくとどめ置き候。」と注意した上で、雪の話だけでなく、雪に関する奇談・説話増やすように牧之に諭している。

翌年の天保六（一八三四）年正月二十四日の書簡にも、

あけてもあけても雪の図ばかりでは、目さきかはらず[71]。

と、再び書いている事から、牧之も京山の要望に対して素直に頷けない頑なな所があったのだろう。山東京山書簡集の書簡から見られる山東京山は、牧之が贈った雪の図や雛形・雪の話について、越後から出稼ぎに来ていた奉公人にあれこれと聞き尋ねたり[72]、鮭の貢物について『延喜式』を引いて自らの意見を述べる[73]など、非常に探究心の強い人間である事が分かる。しかし、その興味の対象は、雪に埋もれた生活ではなく、雪中熊に助けられた人の話や、寒念仏の幽霊の話など、越後の風俗や奇談の方にあった。

天保七（一八三六）年五月に京山は、新しく刷ったばかりの『北越雪譜』を牧之に届けるために、挿絵を描くことになった末息子の京水と供に牧之の住む塩沢を訪れ、その翌年の天保八（一八三七）年に、『北越雪譜』初編が出版された。

発販一挙して七百余部をひさげり[74]

として、天保十二（一八四一）年『北越雪譜』二編が出版される。しかし、この時牧之はすでに耳が聞えなくなり、中風を患っていて思うように筆が動かなかった事と、初編で雪のことを書き切った事に満足したためか、二編は、初編とは一変して雪の記述が少なく、越後の名所図会や奇談集としての性格が強くなる。さらに、牧之の原稿を補うように、「百樹曰く・・・」と、京

山の筆が加えられる。この京山の加筆については、先行の書では批判的に書かれている。井上は、京山の加筆が、二編の全体の三五％を占めていると指摘し、

越後の芭蕉の事蹟や小千谷在に時平の塚があるという俗説にひっかけて芭蕉・道真の伝奇をそれぞれ長々と展開しているところなど、雪とも関係なく、ただ丁数を増すための苦肉の手段としか考えられない[75]。

と厳しく批判している。京山は、知識をひけらかしている、江戸の高みから魚沼のことを小馬鹿にして書いている、そう感じられる文章もままあり、京山が『北越雪譜』出版の立役者でありながら、読者からあまり支持されていないのは、この辺に原因があるのだろう。

確かに、京山の粋で情緒的な文章が、牧之の硬い文章と混じってしまい、『北越雪譜』の統一性が乱れてしまったのは言うまでもない。

しかし、京山の加筆は、他者から見た越後国南魚沼郡の生活という点で非常に興味深い。京山は天保七（一八三六）年五月に末息子の京水と共に魚沼を訪れているが、京山の文章は、そこで見た事、聞いた事について純粋に驚いているように思う。

京山が地芝居の雪中歌舞伎を見ている記事があるが、素人の役者一人一人を江戸の役者の顔に当てはめて楽しみ[76]、雪対策として造られた雪国の家の頑丈さ、市街の雁木の広さに感心して、

両側一里余庇下つづきたるその中を往くこと、甚意快なりき[77]

と京山は記している。また、六月の三国峠の茶店で、江戸ではめったに食べる事の出来ないかき氷が売られている事に驚き、さらにかき氷の上にきな粉をかけて食べる事を面白がっている[78]。他に、京山の泊まり先でもあった、牧之の親戚、岩居の家で出された鮭の天ぷら[79]に驚いたり、地獄谷を訪れた時に突然四、五人の美人芸者が現れ、それが岩居の粋な計らいだという事に心から感心しているのである。いかに京山が、江戸にはない越後の生活・風流を楽しんだか、京山の加筆から見て取れる。

そして、京山が最も非難される箇所、二巻巻之二「天ぷらの説」「煉羊羹の起立」だが、この記事は、京山が岩居に「天ぷら」の名前の起こりが、自

分の兄京伝から来ている事、そして「煉羊羹」名前の由来について、越後の人々に語っているところである。「てんぷらの説」は、京山の考証随筆『蜘蛛の糸巻き』「天ぷらのはじまり」(80) の中にも書かれている。この二つは『北越雪譜』と全く関わりがない、と非難される箇所であるが、この記事だけが『北越雪譜』から独立して書かれているのではなく、前の記事「斎の神の祭」(81) で、岩居が出した鮭の天ぷらを食べている所と繋がり、「てんぷらの説」へと始まるのである。

また、「煉羊羹の起立」にしても、小千谷の桜屋という菓子屋が羊羹を提供し、岩居と同じく、煉羊羹の由来について聞かせて欲しいと頼まれ、江戸の煉羊羹の由来について話しているのである。京山は桜屋の煉羊羹について

味ひ江戸に同じ (82)

と評している。茶の湯の師匠でもあった京山ゆえ、鮭の天ぷら、煉羊羹等、江戸から離れた所にも関わらず、江戸に引けをとらぬ食文化のレベルの高さについて正当に評価し、そして、京山が周りから暖かいもてなしを受けたか、よく分かる部分である。「天ぷらの説」「煉羊羹の起立」は京山の知識のひけらかしでも、身内の自慢でも決してなく、『北越雪譜』の雪話に疲れた箸休めだと感じる。

江戸の人間である京山の筆が入っている事で、初編と違って固さが薄れ、京山が牧之の話に意見を述べている。これは江戸と地方の対比にも見受けられ、また、江戸の文化が地方の文化に寄り添って呼応しているようにも見える。

京山の加筆は、牧之でさえなり得なかった越後にやってきた来訪者として、越後の文化について客観的に、そして正確に描写した江戸のレンズなのである。

第四章　『北越雪譜』出版後の反応

第一節　馬琴の反応

『北越雪譜』出版後の反応については、馬琴が友人に宛てた、馬琴の書簡

で見る事が出来る。

天保八（一八三七）年三月十二日に、牧之から馬琴宛に一通の書簡が来る。内容は、馬琴の片目の視力がなくなった事を気遣う文面、そして『北越雪譜』が出版される事を報告する文面である。

出版成就仕候。初巻一冊は上木して到来、残り二冊も校合も済、遠からず開板、四十年来之大願成就、共に御喜悦奉願上候[83]。

牧之と交渉を決裂した天保元年以来、一度も牧之に書簡を送らなかった馬琴が、天保八（一八三七)）年四月二十日に牧之宛に返事を送る。この文面には、『北越雪譜』の事について何も触れておらず、ただ自分の近況のみ切々と書かれており、非常に穏やかな内容の書簡である。

しかし、その翌々日の二十二日の書簡には、文通相手である紀州和歌山の殿村篠斎宛に、牧之及び『北越雪譜』の批判、そして京山に対して激しい悪意を書き連ねている。手紙では、出版までの経緯と、題名「雪譜」及び板元「丁子屋」について自分の正当性を訴えており、そして、牧之の事を「第一名聞を好む癖あり」牧之の原稿を「略画悪筆」と批判している所を見ると、京山による『北越雪譜』の出版がよほど馬琴の腹に据えかねるものだったのだろう。また、ここでは牧之の原稿の一部を巻物にして返さなかった事を白状している。この事は牧之も馬琴書簡集の序文で

予か書贈定而無用之品と心得る故返し呉と申越すに山東へ見する事のいやさか又者年来牧之の申しわけの為やら、経師屋に申聞けて巻物に鈴木牧之か丹誠を尽した訳書して永代子孫に残すは拙画杯なましいに塊に晒とやいわん、此経師屋万吉又も猶も病気て出来揚らぬ云、虚実は知らねど打捨て置きぬ、此雪譜の事に附、山東庵をさんざんに悪口は玉に疵とはやいわむ[84]

馬琴が牧之に原稿を返さなかったこの行為は、かねてから仲の悪い京山に仕事を取られる事への嫌悪と馬琴から京山へ鞍替えした牧之に対する当て付け以外何ものでもない。

その後、天保八（一八三七）年八月十一日、篠斎と同じ文通相手、伊勢松阪の豪商、小津桂窓に宛てた書簡[85]では、篠斎に宛てて書いた書簡とほぼ

内容は同じであるが、夏に『北越雪譜』三巻が刊行された事と出版までの経緯が記されている。

しかし、十月二十二日の書簡[86]さらに十二月朔日の書簡[87]から、馬琴にも、ちょっとした変化が見られる。『北越雪譜』に対しては、もちろん批判的ではあるが、本が四百五十部以上売れた事に対して評価している。

天保八年以降の日記にも『北越雪譜』についての記事がいくつか見られる。殿村篠斎に宛てた天保九（一八三八）年正月六日、二月六日、そして、六月二十八日の書簡[88]には、牧之・京山の近況及び『北越雪譜』後編の出版が遅れている事を記している。

天保十（一八三九）年、小津桂窓に宛てた正月三日の書簡には、

先々便に被仰示候、『雪譜』にのせ候雪花を、上方にて浴衣地の小紋に染出し候よし、彼書流行ゆえと思召す候よし、さもあるべく候。但し、右の雪花は、『雪譜』開版已前、黙老人『聞ままの記』にものせられ、此の外好事家、写しとり候て、もてはやし候故に、えどにては四五年已前、浴衣地に染出し候へども、さばかり流行不致候キ。去夏、上方にており出し候は弐の町ニて、全く『雪譜』より思ひ起こし候事ニ可有之候。『雪譜』後編、京山づるけにて出来かね候よし、発起人越後の牧之より拙方へ文通の折々催促いたしくれ候様、頼み申し越し候へ共、彼人と不交候故、可申遣れ候様、をしき事に御座候。京山も、当年は六十九に可成候故、著述は労に不堪候歟。これも自然の事と存候外無御座候[89]。

後編の出版が遅れている事と牧之とはしばらく書簡のやり取りが無い事、そして『北越雪譜』初編巻之上「雪の形」[90]の中で描かれた雪の結晶が、上方では浴衣の文様として流行している事が書かれている。『北越雪譜』で描かれた雪の結晶は、元々は下総国古河藩主、土井利位が顕微鏡を用いて描いた『雪華図説』[91]の一部を写したものだが、この幾何学的な模様が受けて、浴衣の文様になっている事が分かる。この雪の結晶柄の浴衣については、弘化二(一八四五)年に初代歌川広重が描いた『東都名所雪の三景　神田明神の朝』で見ることが出来る。

さらに、同年八月十二日の書簡では

覚

一.『越後雪譜料』　代金三両二分

二三十年前、牧之より年々追々画き差越し候「雪譜料」の画稿にて、疎画に候へども、雪の事はうつくし候ものにて、印本の『雪譜』などは此れ百分一にても無之候。壱巻五六十枚づつ有之、大幅也。野生『雪譜』の著述、牧之へ及断候節、此画稿皆牧之へ可返処、さすがに惜しま候間、則代金を遣し、画稿は野生珍蔵にいたし候。＿は疎沫に候へども、実に海内一本の珍書に御座候。三重箱入故、よほどの〆目有之候。此外に

謙信春日山の図説　一本

雪の図説　　二冊

差加候へば、不残にて

金四両に沽却いたし度候。「春日山の城の図」は、越後にも稀なりと云。先年屋代氏聞きて、写したがり候へども、かし不申候キ。尤珍書たるべし[92]。

この書簡は、小津桂窓に宛てに、書物の値段目録を送り、本の買い上げを依頼している内容である。馬琴が売ろうとしているこの画稿は、耽奇会、十二回目の会合で馬琴が持ち寄った「春日山古城図」ではないだろうか。貴重品でもある「謙信春日山の図説」まで売ろうとしているところを見ると、馬琴の経済状況が大分逼迫しているように思える。

天保十一（一八四〇）年あたりから、書簡の内容が『南総里見八犬伝』とその他の作品の進行具合についての記事が殆どとなり、『北越雪譜』に関しては、感情的なものから後編の出版時期についての記事だけとなる。書簡も、殿村篠斎に宛てた四月十一日の書簡[93]と十二月十四日の書簡[94]の二通だけになる。この辺りから馬琴の視力が完全に悪くなったのか、天保十一年の半ばから全て代筆になり、二通目の十二月十四日の書簡も代筆で書かれている。

翌年の天保十二（一八四一）年、正月二十一日に牧之から、自分も左目が見えなくなった事、大雪で人手がかかり困っている事等の自分の近況、馬琴の失明を気遣う文面、そして『北越雪譜』二編の出版を待っている事が書かれているが。それに対して、馬琴は返事を書いていない。

四月十九日の殿村篠斎に宛てた書簡には

『雪譜』出版も当歳暮頃に候や、未だ聢と知れかね候由に御座候[95]。

そして十一月十六日の書簡で殿村篠斎に『北越雪譜』後編が出た事、そして自分の目が見えないため、『北越雪譜』が読めない事などが記されている[96]。初編が大本であったのに対し、後編が半紙摺りで小さくなっている事などいぶかしく思っている点も書かれているが、事務的に書いているところを見ると、『北越雪譜』後編の出版について強い関心を持っているとは思えない。

そして、天保十三(一八四二)年正月十二日の書簡に、

越後雪譜後編も、同人より差出し、同日着きて、御落手なされ候由、承知仕候。

殿村篠斎に『北越雪譜』後編を送り、篠斎の手に届いた事を確認した記述のみで、それ以降馬琴の書簡から牧之と『北越雪譜』についての記事は見ることが出来ない。

これらの書簡を見ると、馬琴の反応は非常に冷ややかだが、『北越雪譜』が売れ行きを伸ばしている事に関しては、素直に認めざるを得なかったのではないか。

牧之の原稿の一部を返さなかった事は、勿論馬琴にも非があるが、多忙であったにも関わらず、出版に向けて自分の作品にも牧之の名前や資料を織り込むなど骨身を削った事、しかし、最終的に交渉が決裂してしまった事、その後牧之が、仲の悪かった京山に出版を依頼してしまった事などを考えると、馬琴にとって『北越雪譜』の出版は甚だ面白くないものであったに違いない。

だが、批判的ではあるものの、『北越雪譜』出版後の反響及び『北越雪譜』後編の行方について、文通相手の小津桂窓・殿村篠斎に逐一報告し本を送っている事などから、馬琴自身も少なからず関心はあったように見える。

交渉が決裂した後も、『北越雪譜』は馬琴に強い未練を残していったらしく、馬琴が二編の出版に執着していた事が、京山の書簡で明らかになっている。

さて右に付兼々申上置候雪出版して、相応にうれ申候はば、大あたりならば勿論なり。

かの人二編をばおれがかかんと、まづ丁子屋をとくしんさせて、丁子屋より二編は私へたのみ申候ゆえ、京山方へは御点前様より御断り可被下候と申すべし[97]。

もし、馬琴から二編の出版について打診してきたら、牧之の方から断ってくれと、京山は頼んでいる。

結局、馬琴と牧之との関係は一体何だったのだろうか。馬琴書簡集に書かれた、馬琴についての牧之の序文

讃州高松御家老越後牧之と日の本広しといへども只二人切りの交りと申来虚実知らねど・・・[98]

この一文が、二人の関係がどのようなものだったのか表わしているのではないか。馬琴にとって牧之は考証サークルの資料提供者であったし、牧之は出版について、文壇の中で顔の広かった馬琴の力がどうしても必要であった。二人は、お互いの利益の上で成り立っていた関係であったと言えよう。

牧之は、『北越雪譜』二編が出版された翌年の天保十三（一八四二）年五月に亡くなり、馬琴はそれから六年後の嘉永元（一八四八）年十一月に亡くなった。

第二節　江戸知識人の反応

『北越雪譜』について、江戸ではどのような反応があったのだろうか。天保八（一八三七）年、『北越雪譜』初編が出版されるが、この本の売上について、『北越雪譜』二編が出版された天保十二（一八四一）年、儒学者の松崎慊堂（こうどう）が記した日記『慊堂（こうどう）日暦』[99]では、天保十二（一八四一）年十一月二十九日の項に、

雪譜、越魚沼郡鈴木牧之著、初編、二編、中に夜光璞を載す[100]。

とある。二編巻之二の「夜光玉」の記事を読んだ事を指している。

馬琴と同じく耽奇会のメンバーでもある雑学者の山崎美成は天保十四（一八四三）年に出された『世事百談』[101]「雪の竿」[102]で雪の竿に関する著述で、『北越雪譜』を挙げ、やや批判的に評している。

また擁書楼と称される程の江戸屈指の蔵書家であった小山田与清は、弘化

四（一八四七）年、『松屋筆記』[103] 百巻[104] で、橇について、橇の図会が、『北越雪譜』上巻に載っている事を紹介し、またソリに関する考証について、『夫木抄』や『会津風土記』と共に『北越雪譜』を挙げている。

喜多村信節は、斎藤月岑の『武江年表』の誤りを直し、記事を新たに付け加えた『武江年表補正略』[105] 一巻、明和元（一七六四）年の記事[106] で、平賀源内が火浣布を発明した年の箇所に、『北越雪譜』二編に書かれた「火浣布」を引用し付け加えている。

越後国佐渡島の宿根木出身の蘭学者、柴田収蔵が記した『庚戌日記』[107] には江戸に滞在していた嘉永三（一八五〇）年十二月に、『北越雪譜』を本屋から借りて読んでいた事が書かれている。十二月の七日・二十一日・二十二日に

北越雪譜を抄書す、[108]

とある。さらに興味深いのは、雑費目録である。嘉永三（一八五〇）年の諸雑費、十二月二十六日の項には

二十六日

・金弐朱（此分拙者出す）と六百弐拾八文　三省と割合　両国　柳川

・五百三拾四文　雀撰茶一箱　同所　井筒屋利助　古賀へ贈る。

・四拾八文　茶の料　同人

・四十八文　小瓢二　浅草蔵前　乾店

・百四拾八文　北越雪譜前後篇見料　本屋　平兵衛[109]

と、本屋から『北越雪譜』を借りたお金が書いてある事である。
雑費目録を見る限り、蕎麦一杯の値段が六拾四文、酒代が百文である事、二十八日には、『しりふごと』二冊を弐百五拾文で買っている事などから、『北越雪譜』はある程度値が張るものだったように思われる。

嘉永六（一八五三）年、吉田松陰が書いた日記『東北遊日記』[110] では、一月二十三日の日記[111] に吉田松陰が佐渡行きの天候を待つ間、出雲崎で『北越雪譜』『北越奇談』等の本を購入し、暇を潰した事が記されている。

安政五（一八五八）年、下総国の医師、赤松宗旦が利根川の中・下流地域について記した地誌『利根川図志』[112] を出版するが、一巻、物産の項の中

で、秋の彼岸になると、鮭が川から上ってくる際に、白い蛾の群れが川の上流に向かって飛び立つ「サケムシ」に関する事例を挙げている。この虫の諸国の名前について、『北越雪譜』初編を挙げ、

この書にいへる所時節の差あるは風土に因れるなるべし又ベットウは蝶の放言なる由をいへり鮭に因ある蝶なればしかいへるあるべし(113)

と考証している。

このように、中央の知識文化人たちが、雪の風俗や鮭漁に関する考証について、『北越雪譜』を挙げている事が分かる。一つの事例について、いくつかの随筆を引用して考証していくスタイルは変わらないが、馬琴が書簡で書いていたように雪の結晶柄の着物が上方で流行した事や、一時的なブームで終わらずに、幕末まで読み続けられていた事を考えると、牧之が言わんとしていた生活の中の雪について肯定的に受け止められてきたのではないだろうか。そして、それに感化された赤松宗旦が『利根川図志』を書くなど、『北越雪譜』は、今まで当たり前のように日常を送り、顧みる事のなかった自分たちの生活や風土について再び眼を向けさせる事ができた、それまでになかった地方文学であると言える。

終　章

『北越雪譜』を改めて読み直すと、雪とその生活についての正確な描写に感心する一方で、喜劇ではない出来事の物語に驚かされることが多い。

十八世紀から十九世紀江戸後期は、身の回りの事物の起源について思いをめぐらせた時代であった。そして江戸の文化人達の興味の対象が、地方にまで波及し、地方文化が、ノスタルジーの対象として愛でられ、地方に古くから伝わる風習や、そこにしかない民具が多く中央の文化人たちによって紹介される事になった。山崎美成や曲亭馬琴が参加した耽奇会や兎園会は、江戸の文化人たちの代表的な文化サロンであったといえる。また、江戸の文化人たちが、地方に旅行に出かけ、そこで見聞きしたものを写実的に記録する、新たなタイプの旅行日記が登場したのもこの頃である。江戸の文化人たちが

『北越雪譜』の出版に強い関心を示し、そして出版された『北越雪譜』が読み手側に好意的に受け止められたのも、こうした江戸における地方文化への関心の高さが背景にあったといえよう。

だが実際に『北越雪譜』が江戸でヒットしたものの、作者である牧之の意図が、果たしてどこまで読み手に伝わったか疑問である。江戸の書物の中で、『北越雪譜』を読んだ、という記録は多くあるものの、ある一つの事例について、その考証のために『北越雪譜』を引用したという内容が殆どである。また、雪の結晶柄の着物が流行するといった、商品としての「雪」がもてはやされ、生活の中の雪を知って欲しいという牧之のメッセージ性と読み手側の都市に住む人間達とのの間に、大きなズレがあるのは否めない。

しかし、『北越雪譜』が時代を越えて、今現在まで読みつがれるようになったのは、それまで書かれることのなかった地方の生活の物珍しさだけではなく江戸と対立して真っ向から意見を述べ、場合によっては江戸の文化人たちをも否定することを厭わなかった牧之の批判精神が、今日の我々にとっても非常に共感しうるものがあったからである。

華やかな中央の文化に疑問を持ち、自分たちの雪に埋もれた生活について、嘘偽りなく、ありのままの姿を他国の人たちに晒す『北越雪譜』は、新たな地方文学の幕を開いた存在ではないだろうか。

註

(1) 『北越雪譜』岡田武松校訂　岩波書店　一九七八年

(2) 「山東京山書簡集」『鈴木牧之資料集』新潟県教育委員会 一九六一年　一七七頁

(3) 「北越雪譜二編凡例」『北越雪譜』二編　岩波書店　一九七八年　一六六頁

(4) 「雪竿」『北越雪譜』初編巻之上　岩波書店　一九七八年　二十六頁

(5) 考証サークルに関する先行研究は以下の通りである。
『江戸の蔵書家たち』岡村敬二　講談社メチエ　一九九六年
『日本考古学　人類学史』上巻　清野謙次　岩波書店　一九五四年
「歴史の読出し/歴史の受肉化」表智之『江戸の思想』第七巻　ペリカン社　一九九七年

(6) 『耽奇漫録』上巻　吉川弘文館　一九九三年　六九九頁

(7) 『耽奇漫録』下巻　吉川弘文館　一九九四年　一五三頁
(8) 同上　一九七頁
(9) 同上　六四一頁
(10)『日本随筆大成』第二期第一巻　吉川弘文館　一九七三年　七十五頁
(11)『日本随筆大成』第一期第五巻　吉川弘文館　一九七五年
(12)「滝沢馬琴書簡集」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会 一九六一年　一三四頁
(13) 注十参照　三十九頁
(14)『東遊雑記』古川古松軒　東洋文庫二十七巻　一九六四年
(15)『東西遊記１』橘南谿　東洋文庫二四八巻　一九七四年
(16)『越後路之記 金草鞋第八編』　郷土出版社　一九九六年
(17)『越後紀行 滑稽旅烏』郷土出版社　一九九六年
(18)「芭蕉翁が遺墨」『北越雪譜』二編巻之二　岩波書店　一九七八年　二一九頁
(19) 注十四参照　一一九頁
(20) 注十四参照　一二五頁
(21) 同上　一〇頁
(22)『日本随筆大成』第一期第九巻　吉川弘文館　一九七六年　三一四頁
(23)「化石渓」『北越雪譜』二編巻之二　岩波書店　一九七八年 二二六頁
(24)『越佐叢書』十五巻 十六巻　野島出版　一九七八年
(25)『越佐叢書』十五巻 野島出版　一九七八年　二十四頁－二十五頁
(26)「菱山の奇事」『北越雪譜』初編巻之中　岩波書店　一九七八年 九十四頁
(27)『北越奇談』橘崑崙　野島出版　一九九九年
(28)「芭蕉翁が遺墨」『北越雪譜』二編巻之二　岩波書店　一九七八年 二一九頁
(29)「山東京伝年譜考」水野稔　近世文芸十三号　一九六七年
(30)「永世記録帳」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　二三頁
(31)「山東京伝書簡集」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　一八五頁
(32)「永世記録帳」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　四一頁
(33)「山東京山書簡集」『鈴木牧之資料集』新潟県教育委員会　一九六一年　一九八頁
(34)『日本随筆大成』第三期第六巻　吉川弘文館　一九七六年
(35) 同上　四二七頁
(36)「玉山翁が雪の図」『北越雪譜』初編巻之中　岩波書店　一九七八年　七〇頁
(37)『絵本太閤記』中巻　有朋堂　一九二七年　四六〇頁－四六一頁
(38)「永世記録帳」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　四一頁
(39) 同上　四一頁

(40) 同上　四一頁
(41)「滝沢馬琴書簡集」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　一三七頁
(42) 同上　一三七頁
(43) 同上　一三七頁
(44) 同上　一四八頁
(45)「出版社と読者」前田愛　国文学鑑賞と解釈二十六巻一号　一九六一年
(46)『日本随筆大成』第一期第五巻　吉川弘文館　一九七五年　二八四頁－二八五頁
(47)「馬琴の短編合巻」水野稔　文芸研究十一号　一九六四年
(48)『南総里見八犬伝（四）』岩波書店　一九九〇年　一五六頁
(49)『馬琴書翰集成』第一巻　八木書房　二〇〇二年　一六四頁
(50) 同上　二〇六頁
(51) 篠斎宛に
「文政十一年正月十七日　『越後雪譜』も、此節ほりたがり候板元御座候。近年後、とりかかり可申候。」『馬琴書翰集成』第一巻　八木書房　二〇〇二年　二〇八頁
(52)『馬琴日記』第一巻　中央公論社　一九七三年　四〇七頁
(53)『南総里見八犬伝（四）』岩波文庫　一九九〇年　二四四頁～二四五頁
(54) 同上　二四六頁
(55「『山東京山書簡集』小考――『北越雪譜』出版をめぐって」津田真弓　国文目白第二十巻
(56)「熱海温泉図絵」『山東京山伝奇小説集』国書刊行会　二〇〇三年　七九〇頁－八二二頁
(57)「山東京伝書簡集」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　一八〇頁
(58) 同上　一八一頁
(59)「鷲談伝奇桃花流水」『山東京山伝奇小説集』国書刊行会　二〇〇三年　一九七頁－三二三頁
(60) 同上　三二二頁
(61)「復讐妹背山女庭訓」『山東京山伝奇小説集』国書刊行会　二〇〇三年　十五頁－六十六頁
(62)「滝沢馬琴書簡集」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　一四七頁
(63) 同上　一四七頁
(64)「山東京伝書簡集」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　一九一

頁－一九三頁
(65)「滝沢馬琴書簡集」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　一三三頁
(66)「山東京伝書簡集」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　一八五頁
(67) 同上　一七八頁
(68) 同上　一八〇頁
(69) 山東京山の生い立ちについては、津田真弓の「山東京山伝奇考――大名家のつながりを中心に――」が詳しい　近世文芸七十一号　二〇〇〇年
(70)「山東京伝書簡集」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　二〇二頁
(71) 同上二〇六頁
(72) 同上　一九六頁　二一八頁
(73) 同上　二二〇頁
(74)「北越雪譜二編凡例」『北越雪譜』二編　岩波書店　一九七八年　一六六頁
(75)「北越雪譜の出版と改刻」井上慶隆　新潟史学創刊号　一九六八年 九〇頁
(76)「雪中の劇場」『北越雪譜』二編巻之一　岩波書店　一九七八年　一八六頁
(77)「家内の氷柱」『北越雪譜』二編巻之一　岩波書店　一九七八年　一八八頁
(78)「削氷」『北越雪譜』二編巻之一　岩波書店　一九七八年　二〇〇頁
(79)「斎の神祭」『北越雪譜』二編巻之二　岩波書店　一九七八年　二四六頁
(80)『日本随筆大成』第二期第四巻　吉川弘文館　一九七四年　三一四頁
(81) 注七十三参照　二四六頁
(82)「煉羊羹の起源」『北越雪譜』二編巻之二　岩波書店　一九七八年　二四八頁
(83)『馬琴書翰集成』第六巻　八木書房　二〇〇三年　二六五頁
(84)「滝沢馬琴書簡集」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　一三二頁
(85)『馬琴書翰集成』第四巻　八木書房　二〇〇三年　三四八頁
(86) 同上　三五四頁
(87) 同上　三六一頁
(88)『馬琴書翰集成』第五巻　八木書房　二〇〇三年　二五頁
(89) 同上　七五頁
(90)「雪の形状」『北越雪譜』初編巻之上　岩波書店　一九七八年　二〇頁
(91)「雪華図説」『日本科学古典全書』第六巻　朝日新聞社　一九四二年　六三三頁―六八四頁
(92)『馬琴書翰集成』第五巻　八木書房　二〇〇三年　一一二頁

(93) 同上　一七一頁
(94) 同上　二三九頁
(95) 同上　二九四頁
(96) 同上　三二四頁
(97)「山東京山書簡集」『鈴木牧之資料集』新潟県教育委員会　一九六一年　二二五頁
(98)「滝沢馬琴書簡集」『鈴木牧之書簡集』新潟県教育委員会　一九六一年　一四七頁
(99)『慊堂日暦』第六巻　東洋文庫第四二〇巻　一九八三年
(100)同上　一七三頁
(101)『日本随筆大成』第一期第十八巻　吉川弘文館　一九七六年　三三頁
(102) 同上　三二頁
(103)『松屋筆記』第三巻　国書刊行会　一九〇八年
(104)同上　二六七頁
(105)『定本　武江年表』第三巻　大宝者　一九九八年
(106)同上　一〇四頁
(107)『柴田収蔵日記』　東洋文庫第六〇八巻　一九九六年
(108)同上　二四五頁、二四七頁
(109)同上　二八〇頁
(110)『吉田松陰全集』第十巻　山口県教育委員会　二〇〇一年
(111)同上　二四九頁
(112)『利根川図志』岩波書店　二〇〇四年
(113)同上　六十八頁